讀花經集

卷之二十六

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集　巻二十三　第二十三回配本（全一十九巻）

定價二千六百圓

昭和十七年六月二十二日　第二刷發行
昭和五十年九月　二　日　第二刷發行

著　者　泉　鏡　太　郎

發行者　岩　波　雄　二　郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發行所　株式會社　岩　波　書　店
電話（〇三）二六二－四二一

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1975

目次

紅玉（大正二年七月）……一
海神別莊（大正二年十二月）……二九
戀女房（大正二年十二月）……七九
湯島の境內（大正三年十月）……二一三
錦染瀧白糸（大正五年二月）……二三五
日本橋（大正六年五月）……二五七
天守物語（大正六年九月）……四四九
山吹（大正十二年六月）……五〇一

戰國茶漬（大正十五年一月）……五三七
多神教（昭和二年三月）……五九七
お忍び（昭和十一年一月）……六三七
かきぬき……六八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

紅

玉

時。

現代、初冬。

場所。

府下郊外の原野。

人物。

畫工。　侍女。（烏の假裝したる）

貴夫人。　老紳士。　少紳士。　小兒五人。

――別に、三羽の烏。（侍女と同じ扮裝）

小兒一　やあ、停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣つて來たぜ。

小兒二　何だい〳〵。

小兒三　あゝ、大なものを背負つて、蹌踉々々來るねえ。

小兒四　影法師まで、ぶら〳〵して居るよ。

小兒五　重いんだらうか。

小兒一　何だ、引越かなあ。

小兒二　構ふもんか、何だつて。

小兒三　御覽よ、脊よりか高い、障子見たやうなものを背負つてるから、凧が歩行いて來るやうだ。

小兒四　絲をつけて揚げる眞似エして遣らう。

小兒五　遣れ〳〵、おもしろい。

凧を持つたのは凧を上げ、獨樂を持ちたるは獨樂を廻す。手にものなき一人、一方に向ひ、凧の絲を手繰る眞似して笑ふ。

畫工　（枠張のまゝ、絹地の畫を、やけに紐からげにして、薄汚れたる背廣の背に負ひ、初冬、枯野の夕日影にて、あか〳〵と且つ寂しき顏。醉へる足どりにて登場）……落第々々、大落第。（ぶらつく體を杖に突掛くる狀、疲切つたる樵夫の如し。しばらくして、叫ぶ）畜生、狀を見やがれ。

聲に驚き、且つ活ける玩具の、手許に近づきたるを見て、絲を手繰りたる小兒、衝と開いて素知らぬ顏す。

畫工、其の事には心付かず、立停まりて嬉戯する小兒等を眄す。

よく遊んでるな、あゝ、羨しい。何うだ。皆、面白いか。

小兒等、彼の樣子を見て忍笑す。中に、絲を手繰りたる一人。

小兒三　あゝ、面白かつたの。

畫工　（管をまく口吻）何、面白かつた。面白かつたは不可んな。今の若さに。……小兒をつかまへて、今の若さも變だ。（笑ふ）はゝゝは、面白かつたは心細い。過去つた事のやうで情ない。面白いと云へ。面白がれ、面白がれ。尙ほ其の上に面白く成れ。むゝ、何うだ。

小兒三　だつて、兄さん怒るだらう。

畫工　（解し得ず）俺が怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命がけで、描いて文部省の展覽會

で、平つくばつて、可いか、洋服の膝を膨らまして膝行つてな、いゝ圖ぢやないぜ、審査所のお玄關で頓首再拜と仕つた奴を、紙鐵砲で、ポンと撥ねられて、ぎやふんとまゐつた。それでさへ怒り得ないで、悄々と杖に縋つて背負つて歸る男ぢやないか。景氣よく馬肉で呷つた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい處へ、げつそり空腹と來て、蕎麥ともいかない。停車場前で饂飩で飲んだ、臟腑が宛然蚯蚓のやうな、しツこしのない江戸兒擬が、何うして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらしやない。

他の小兒はきよろ〳〵見て居る。

小兒三　何だか知らないけれどね、今、向うから來る兄さんに、絲目をつけて手繰つて居たんだぜ。

畫工　何だ、絲を着けて……手繰つたか。いや、怒りやしない。何の眞似だい。

小兒一　兄さんがね、然うやつてね、ぶら〳〵來た處がね。

小兒二　遠くから、まるで以て、凧の形に見えたんだもの。

畫工　はゝあ、凧か。(背負つてる繪を見る)むゝ、其處で、(仕形しつゝ)と遣つて面白がつて居たんだな。處で、俺が恁う近く來たから、怒られやしないかと思つて、其の惡戲を止めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。……かつたは寂しい、つまらない。壯に面白がれ、もつと面

白がれ。さあ、絲を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧に成つて、上つて遣らう。上つて、高い空から、上野の展覽會を見て遣る。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの兒來て煽れ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。（笑ふ）はゝゝ、面白い。

小兒等しばらく逡巡す。畫工の機嫌よげなるを見るより、一人は、畫工の背を抱いて、凧を煽る眞似す。一人は駈出して距離を取る。其の一人。

小兒三　やあ、大凧だい、一人ぢや重い。

小兒四　うん、手傳つて遣ら。（と獨樂を懷にして、立並ぶ）——風吹け、や、吹け。山の風吹いて來い。——（同音に囃す。）

畫工　（あふりたる兒の手を離るゝと同時に、大手を開いて）恁う成りや凧繪だ、提灯屋だ。そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、べつかつこだ。

小兒等の絲を引いて駈るがまゝに、ふら〳〵と舞臺を飛廻り、やがて、樹根に撞と成りて、切なき呼吸つく。

暮色到る。

小兒三　凧は切れ了つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

小兒一　暗く成つた。――丁ど可い。

小兒二　又、……あの事をしよう。

其の他　遣らうよ、遣らうよ。――（一同、手はつながず、少しづゝ間をおき、ぐるりと輪に成りて唄ふ。）

青山、葉山、羽黑の權現さん

あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

唄ひつゝ、廻りつゝ、繰返す。

畫工　（茫然として默想したるが、吐息して立つて此を視む。）おい、おい、其は何の唄だ。

小兒一　あゝ、何の唄だか知らないけれどね、恁うやつて唄つて居ると、誰か一人踊出すんだよ。

畫工　踊る？　誰が踊る。

小兒二　誰が踊るつて、此のね、環の中へ入つて蹈んでるものが踊るんだつて。

畫工　誰も、入つては居らんぢやないか。

小兒三　でもね、氣味が惡いんだもの。

畫工　氣味が惡いと？

小兒四　あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。

踊るまいと思つても。だもの、氣味が惡いんだ。

畫工　遣つて見よう、俺を入れろ。

一同　やあ、兄さん、入るかい。

畫工　俺が入る、待て、（畫を取つて大樹の幹によせかく）さあ、可いか。

小兒三　目を塞いで居るんだぜ。

畫工　可、此の世間を、醉つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黑の權現さん

小兒等唄ひながら畫工の身の周圍を廻る。環の脈を打つて伸び且つ縮むに連れて、畫工、殆んど、無意識なるが如く、片手又片足を異樣に動かす。唄ふ聲、愈々冴えて、次第に暗く成る。

時に、樹の蔭より、顏黑く、嘴黑く、烏の頭して眞黑なるマント樣の衣を裾まで被りたる異體のもの一個顯れ出で、小兒と小兒の間に交りて齊しく廻る。

地に踞りたる畫工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る眞似す。

續いて、初の黑きものと同じ姿したる三個、人の形の烏。樹蔭より顯れ、同じく小兒等の間に交つて、畫工の周圍を繞る。

小兒等は絶えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の烏出でて輪に加はる頃より、畫工全く立上り、我を忘れたる狀して踊り出す。初手の烏もともに、就中、後なる三羽の烏は、足も地に着かざるまで跳梁す。

彼等の踊狂ふ時、小兒等は唄を留む。

一同　（手に手に石を二ツ取り、カチ〳〵と打鳴らして）魔が來た、でん〳〵。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂しく囃す）眞個に來た。そりや來た。

小兒のうちに一人、誰とも知らず恁く叫ぶとともに、ばら〳〵と、左右に分れて逃げ入る。

木の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人の畫工と四個の黑き姿と頻に踊る。畫工は靴を穿いたり。後の三羽の烏皆爪尖まで黑し。初の烏ひとり、裾をこぼるゝ褄紅に、足白し。

畫工　（疲果てたる狀、挫と仰樣に倒る）水だ、水をくれい。

いづれも踊り留む。後の烏三羽、身を開いて一方に翼を交はしたる如く、腕を組合せつゝ立ちて視む。

初の烏　（うら若き女の聲にて）寢たよ。まあ……だらしのない事。人間、恁うは成りたくないものだわね。——其のうちに目が覺めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも成るまいから。

……どれ、（樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉したる三脚の竹を取出して据ゑ、次に、其上に圓き板を置き、卓子の如くす。）

後の烏、此の時、三羽とも無言にて近づき、手傳ふ狀にて、二脚のズック製、おなじ組立ての床几を卓子の差向ひに置く。

初の烏、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶を取出だし卓子の上に置く。後の烏等、青き酒、赤き酒の瓶、續いてコップを取出だして並べ揃ふ。

やがて、初の烏、一挺の蠟燭を取つて、此に火を點ず。

舞臺明くなる。

初の烏（思ひ着きたる體にて、一ッの瓶の酒を玉盞に酌ぎ、燭に翳す。）おゝ、綺麗だ。燭が映つて。透徹つて、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、丁ど東の空に立つた虹の。其の虹の目のやうだと云つて、薄雲に翳して御覽なすつた、奥樣の白い手の細い指には重さうな、指環の球に似てること。

三羽の烏、打傾いて聞きつゝあり。

あゝ。玉が溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。（烏の頭を頂きたる、咽喉の黑き布をあけて、少き女の面を顯し、酒を飲まんとして猶豫ふ）あれ、こゝは私には口だけ

れど、烏にすると丁ど咽喉だ。可厭だよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、氣に成る。よさう。まあ、獨言を云つて、誰かと話をして居るやうだよ……

（四邊を眴す）然う〳〵、思つた同士、人前で内證で心を通はす時は、一ッに向つた卓子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽な、しかし脈を打つて、血の通ふ、其の符牒で、默つて居て、暗號が出來ると、何時も奥樣がおつしやるもんだから。——卓子さん（卓をたゝく）殊にお前さんは三ッ脚で、狐狗狸さん、其のまゝだもの。活きてるも同じだと思ふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、少々大事なことを饒舌つたんだから、お前さん聞いたばかりにして置いておくれ。誰にも言つては不可いよ。一寸、注いだ酒を何うしよう。ああ、いゝ事がある。（醉倒れたる畫工に近づく。後の烏一ッ、同じく近寄りて、畫工の項を抱いて仰向けにす。）

醉ぱらひさん、さあ、冷水。

畫工（飲みながら、現にて）あゝ、日が出た、が、俺は暗夜だ。（其まゝ寢返る。）

初の烏　日が出たつて——赤い酒から、私の此の烏を透かして、まあ。——畫に描いた太陽の夢を見たんだらう。何だか謎のやうな事を言つてるわね。——さあ〳〵、お寢室ごしらへをして置きませう。（もとに立戻りて、又薄の中より、此のたびは一領の天幕を引出し、卓子を蔽うて

建廻はす。三羽の烏、左右より此を手傳ふ。天幕の裡は、見ぶつ席より見えざるあつらへ。）
お樂みだわね。（天幕を背後にして正面に立つ。三羽の烏、其の兩方に彳む。）
もう、すつかり日が暮れた。（時に、はじめてフト自分の他に、烏の姿ありて立てるに心付く。
されどおのが目を怪む風情。少しづゝ、あちこち歩行く。歩行くに連れて、烏の形動き絡ふを
見て、次第に疑惑を增し、手を擧ぐれば、烏等も同じく擧げ。袖を振動かせば、齊しく振動か
し、足を爪立つれば爪立ち、踞めば踞むを透し視めて、今はしも激しく恐怖し、慌しく駈出す。）
帽子を目深に、オーバコートの鼠色なるを被、太き洋杖を持てる老紳士、憂鬱なる重き態度
にて登場。
初の烏ハタと行當る。驚いて身を開く。紳士其の袖を捉ふ。初の烏、遁れんとして威す眞似
して、かあ〳〵、と烏の聲をなす。泣くが如き女の聲なり。
紳士　こりや、地獄の門を背負つて、空を飛ぶ眞似をするか。（摑ひしぐが如くにして突離す。初
の烏、撞と地に坐す。三羽の烏は故とらしく吃驚の身振をなす。）地を這ふ烏は、鳴く聲が違ふ
ぢやらう。うむ、何うぢや。地を這ふ烏は何と鳴くか。
初の烏　御免なさいまし、何うぞ、御免なさいまし。
紳士　はゝあ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさいましと鳴くぢやな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook